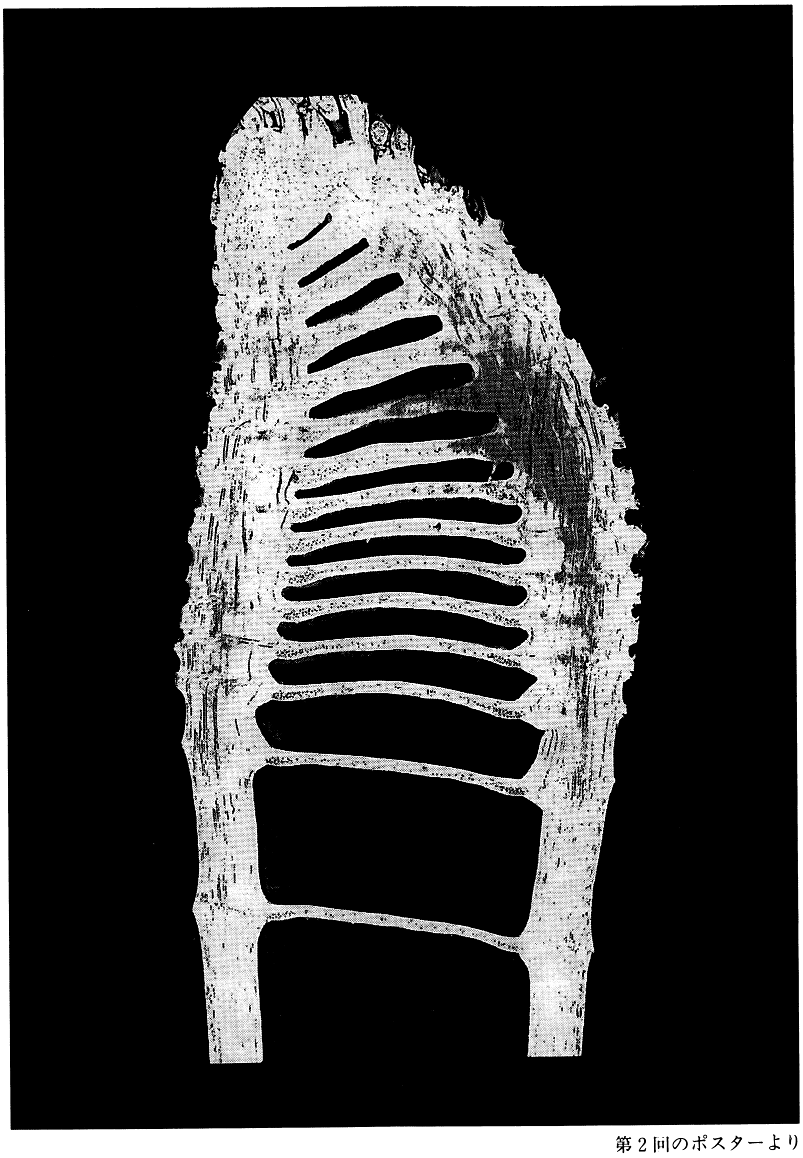
バンブーインスタレーションの展開

The Development of the Bamboo Installations

西尾貞臣
Sadaomi Nishio



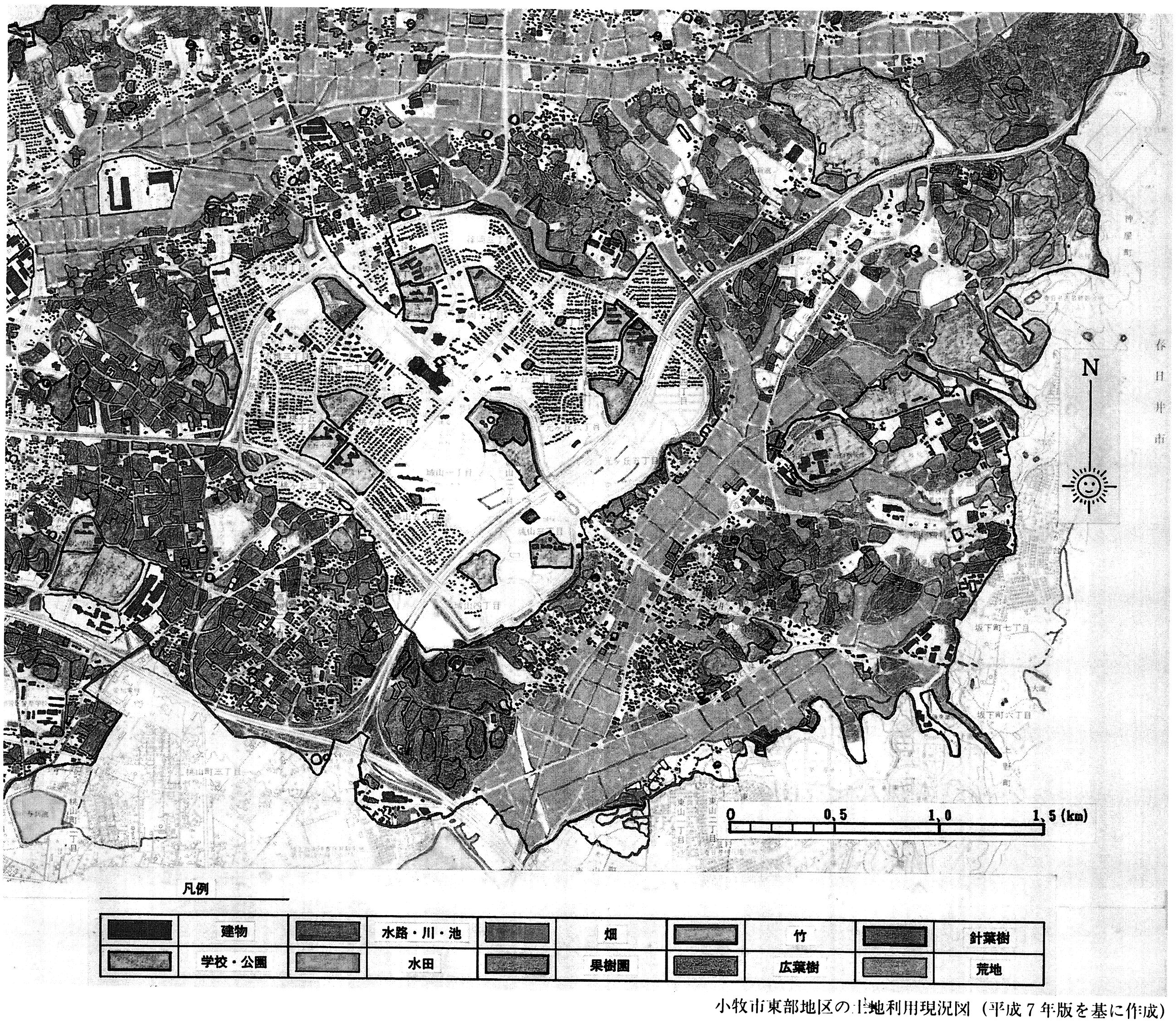
第2回のポスターより

はじめに

「バンブーインスタレーションinおおくさ」を、1994（平成6）年秋に実施し、以後、毎年継続して行なうことができ、3年、3回の実績ができた。

これは、多くの人々のエネルギーの結集によって、はじめて実現出来たのであり、先ず、このイベントに関わってきた全ての人々に感謝したい。

そして、この行事は、この地域に住む人、関わる人、関心を持つ人、各自が、それぞれのスタンスで参加し、色々感じとることが出来るイベントである。ここに、今までの活動を記録し、今後に向けての指針とするとともに、広く、このイベントを知っていただく思いを込めて、以下にまとめたい。



小牧市東部地区の土地利用現況図（平成7年版を基に作成）

1　背景と経過

a　「おおくさ」地域の変容

この「おおくさ」地域は、以下の要因によって、大きな変容を遂げて来た。

すなはち、中央自動車道の開通。

本短期大学・名古屋造形芸術短期大学の、この地への移転。

そして、桃花台ニュータウンの開発、これにともなう新住人の急激な増加、等々。

特に、桃花台ニュータウンの開発は、ここの風景を大きく変えてきている。

都市近郊の住宅団地開発の典型が、ここにある。

20年の経過は、この桃花台ニュータウンを徐々に、落ち着いた住生活の場に、変えてきているが、地域全体の状況としては、一方では、周辺の従来の環境の中での田舎的生活が営まれ、他方で、新しく開発された住宅団地の中での都市的生活が営まれて、両者は、個々のつながりからの交流や共同意識を持つものの、総体としては、それぞれが個別に背中合わせの生活を営んでいる。

この状況を乗り越え、如何に、この地域を共通の生活の舞台であると捉え、この地域への愛着を育んでいくことが出来るか。

人々の出会い・交流が広がり深まっていくか。

この「おおくさ」地域は、人的にも場的にも、実に豊かな地域であると認識する。

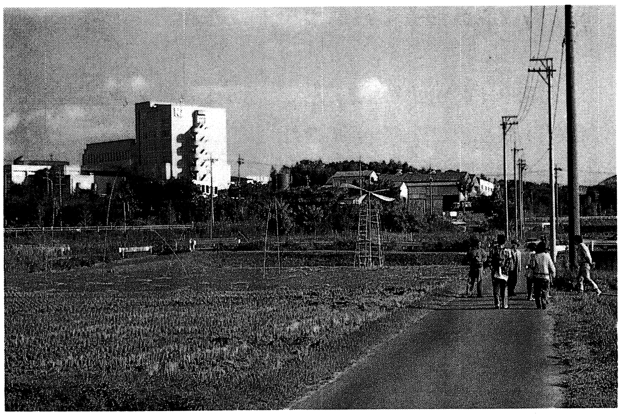
自然と人工、歴史・文化、人の多様性、粗と密、都市と農村、生産と消費、起伏、産業、などなど。

これらは、豊かさの基本である多様性、重層性を保証している。

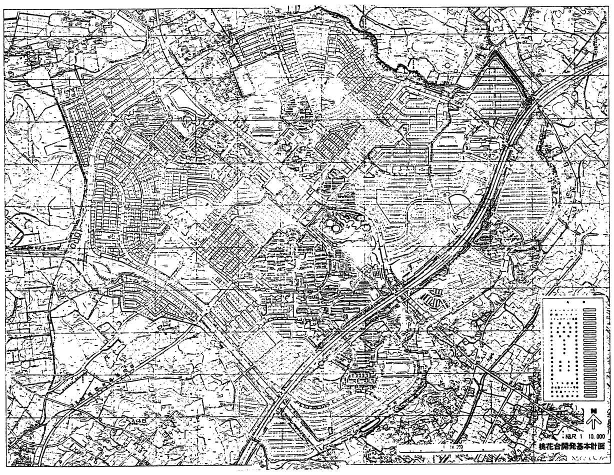
ここに於いて、本大学の存在は特に重要である。

今後、この地域は、どのような環境になっていくのであろうか。

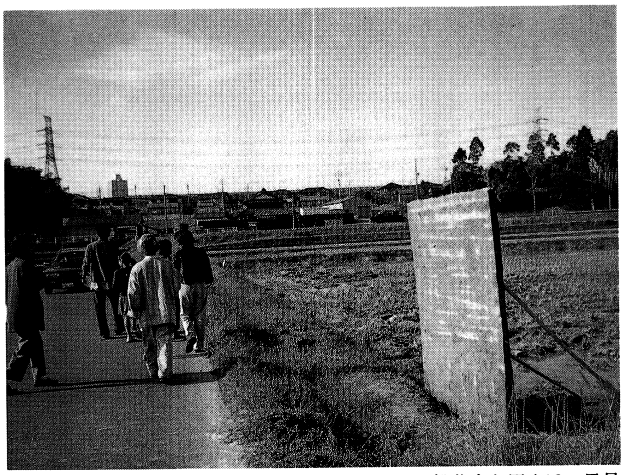
それぞれが自立しつつ、全体の調和の中にある、より良い全体性を、持つに到るであろうか。



本大学の前に広がる田んぼの風景



桃花台開発基本計画図



桃花台と田んぼの風景

b　名古屋造形芸術短期大学での動き

1989（平成元）年初夏、「おおくさ展」が、本大学のDギャラリーで開催された。

これは、本大学の有志の先生・職員・学生の方々によって、この地への移転を契機に、調査研究されてきた5年間の成果を、地元の人々との交流会を重ねての「展示会」であった。

この地域の歴史・伝統・文化の掘り起こしからの、自然や環境、生活史などの調査研究。
各位の専門分野に関する研究。
大久佐八幡宮の絵馬の研究。
柿渋の研究。
遊び、通学、生活など、この地域の生活史。
この地域をフィールドとして、芸術村の提案。
興味深い展示会・「おおくさ展」であった。

また、地域の主だった、「おおくさ」の齢を重ねた人たちとの交流・ヒヤリングの会。
この録音の記録を、後に聞くことができた。
そして、私の世代の数人も、お招きいただき、交流・ヒヤリングの場を、得ることが出来たのだった。

この時の盛りだくさんの展示や交流から、多くの刺激や情報を得るとともに、先生方との会話から、この「おおくさ」地域に、働きかけていくヒントを得たように思う。

本大学のDギャラリーで'89に開かれた「おおくさ展」のDM

c　その後の経過

この「おおくさ展」見学の後、確たるイメージはないが、何らかの行動を、この地域に起こしたい、働きかけたいと、考えはじめていた。

その後、1992（平成４）年より、非常勤で本短期大学に通うこととなり、有志の先生方と、日常の動きの中で、お会い出来るようになった。

特に、後藤元一助教授、品川誠助教授、鈴木勝之講師の３氏に、いろいろな思い・考えを、お話しする中で、後藤助教授の転勤も有り、先の「展示会」の様々な資料を、お預かりすることとなった。

この膨大な資料を如何に生かし、この地域の大勢の人々に、還元していくか。

重たい課題を与えられたのだった。

この課題の一つの解答として、上記「おおくさ展」から５年目の1994（平成６）年を目安に、大学より外に出て、地域の中で、第２回「おおくさ展」の開催をと、構想しはじめた。

そのまま具体的な展開もなく、月日は過ぎていったが、1993（平成５）年11月頃から、地域に対して関心、興味、問題意識を、より具体的に抱く中で、私の周辺の顔触れに働きかけ、酒を交えてのミーティングを重ね、1994（平成６）年３月、「おおくさ探険隊」の名称もと、この地域への働きかけの母体を結成した。

ここから、この地域の自然、歴史、環境を知る、言わばハードの要素への働きかけと並行して、人と人の出会いと交流と言うソフトの要素への働きかけが、もう一つの柱として打ち立てられた。

地域をもっと良く知ることから、この地域の良さも欠点も見えて来よう。

ここから、何を守り生かし、何を改善し補正していくかの問い、そして、私たちの日常生活の舞台を良くしていきたいとの思いが、育まれてくる。

ここ「おおくさ」地域に生活する人々、ここに関わる人々、それぞれが、互いの存在を知り認め合い、交流が広まり、コミュニケーションが展開されていくこと。

住人同士の出会い交流は、地域を知ることと同様に、重要で本質的なことである。

この課題への、有力な手だてとして、野外での竹の造形展・「バンブーインスタレーション」が構想され、確かなものになってきた。

かわら版・号外'94.10「おおくさ博覧会」の表紙

2　竹のアート

a　ネーミングについて

ネーミングについても、かなり検討した。

まず最初に、「ものをつくる」ということ。

これは、この地域に、芸術系の本大学・短期大学のあることが、強い刺激・連想となった。

作品と鑑賞、双方への人々の参加、そして、ここから、人々の出会い交流の展開を、イメージした。

次に、「おおくさ」の風景の中で、ということ。

これは、クリストのアンブレラ・プロジェクトが、先ず、連想・イメージされた。

そして、日本の各地での、自治体主導のイベントも想起された。

しかし、単に「はれ」としてのイベントではなく、住人一人一人がこの地域を、共通の住み生活する場と認識し、制作や鑑賞に参加するイベント、として位置付ける。

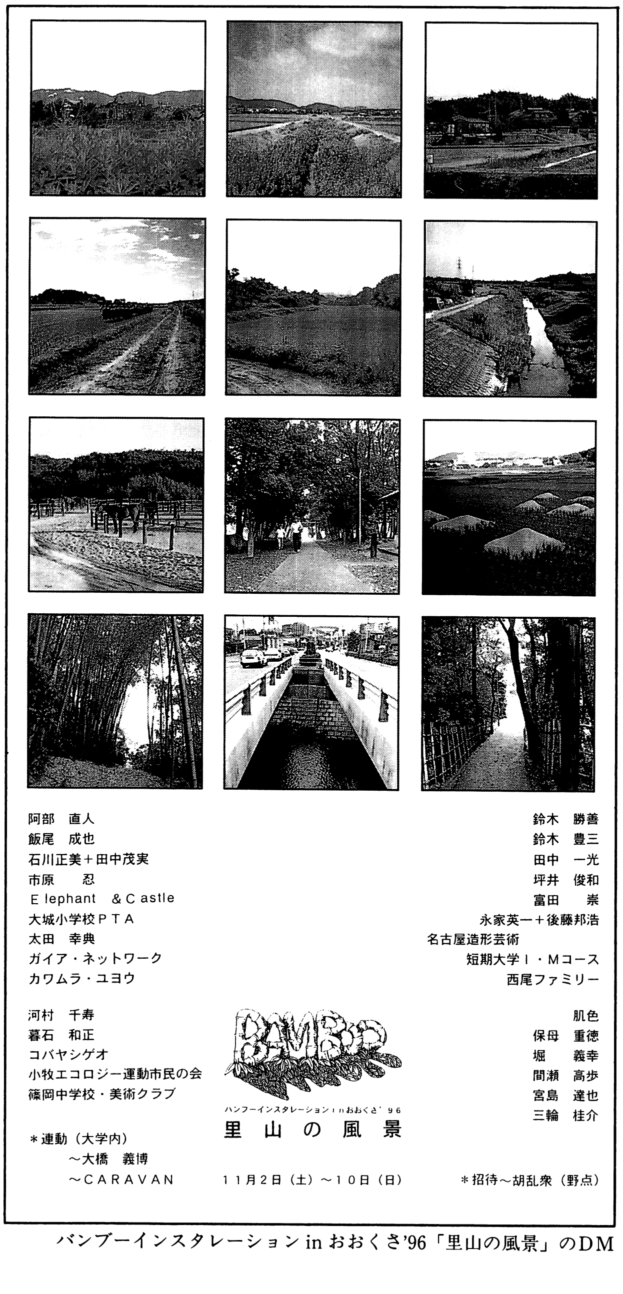
そして、素材の検討。

これは、後にも触れるが、本大学のカリキュラムの中で、地元（個人）の協力を得て、竹を、素材・材料として使われていたという経緯を聞き知っていたことから、自然に「竹」が想定された。

これらを踏まえ、どんなネーミングが良いのか。

名前の重要性を認識しつつ、「バンブーインスタレーション」でスタートした。　が、定着しつつある一方、まだ、これだ!と言い切れていない。

オープンにして置き、柔軟に考えよう。



バンブーインスタレーションinおおくさ’96「里山の風景」のDM

b　バンブー（竹）であること

かつては、入り合の里山であれ個人の里山であれ、日々の生活の中で、密接に関わり、それが手入れともなり、美しい里山に保たれていた。

しかし、日本全体の動向に従い、この地域も、高度成長の波に組み込まれていき、家庭に新しい文明が普及浸透する中で、かまどや風呂の燃料も、薪から石油・ガス・電気に代わっていった。

雑木の薪から、大きな利用で言えば新築の木材も、自給から購入へ、分業・専門化へと、状況は大きく移り変わり、集落周囲の里山は、日常生活の中では、関わる林・山ではなく、入らないで眺める里山に、なっていった。

また、この地域の特徴である果樹（モモ、カキ、ウメ、クリ、リンゴ、ナシ、ブドウ、など）の多くは、商品作物から自家消費の果樹となり、やがて、手入れする人の高齢化もあり、放置されてきている。

こうして、荒れた里山が、出来上がってきた。

この状況での生態系の中では、竹が最も生命力があり、他の植物をどんどん駆逐し、勢力を広げてきている。

統計によれば、一般の里山・雑木林の分布域が、宅地開発などで、どんどん減少していく中で、唯一、竹が、その分布域を保つどころか、むしろ広げてきていると聞く。

こうした背景からも、竹を素材にした作品展という、素材についてのイメージが、固まってきた。

竹林の中の風景

かわら版・号外'95.10「幻の風景」の表紙

c　野外の展示～インスタレーション

屋外の、しかもこの「おおくさ」の田んぼの中に、作品展示する「インスタレーション」を、構想した。
竹を用いて、田んぼの中に、ここの景観に働きかける、期間限定の、立体造形の出現。

＊　素材～竹

上記を踏まえ、この竹を生かすことを考えた。
あくまでもメインの素材は、竹。
制作者の裁量で、他の素材を用いるルール。
竹は、地元の竹林所有者のご協力により、利用させていただく。
出来れば、切り出しに制作者も参加し、里山に入り込み、触れ親しんでもらいたい。

＊　場所～田んぼ

田んぼの広がりは、里山とともに「おおくさ」の風景の基盤を成している。
この中で、是非、作品を制作・展示し、鑑賞してもらいたい。
田んぼの中に入り込み、触れ親しんで、もらいたい。
期間は、稲刈り後、田おこし前の、約２ケ月に限られている。

この期間の内に、本大学の「芸術祭」も含まれている。

'96年の作品より

'95年の作品より

＊　テーマ～水

ここを流れる八田川に、意識を据える。

水は、全ての生命の源であり、根本である。

里山や田んぼの存続は、八田川に直結している。

この八田川を背骨に広がるこの田んぼの風景に、意識を向け、足元の環境を再発見・再認識する、きっかけ・誘発剤に、この「インスタレーション」が、なってほしい。

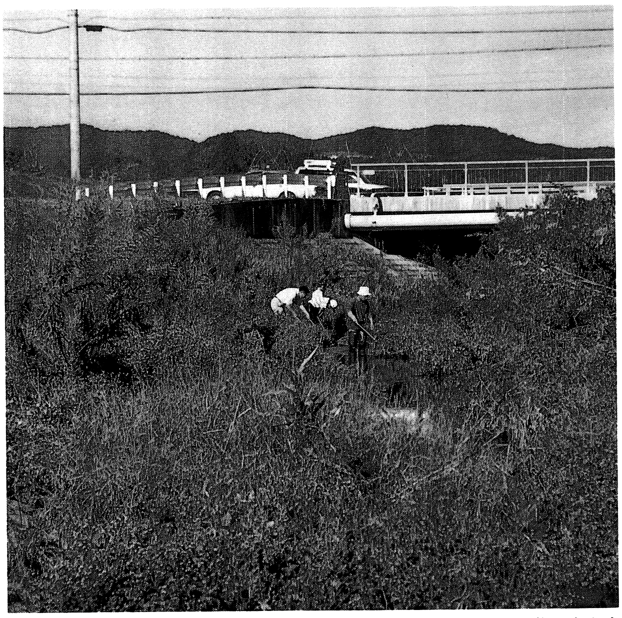
＊　作品から風景へ

風景は、ここでの人間の営みを如実に反映する。

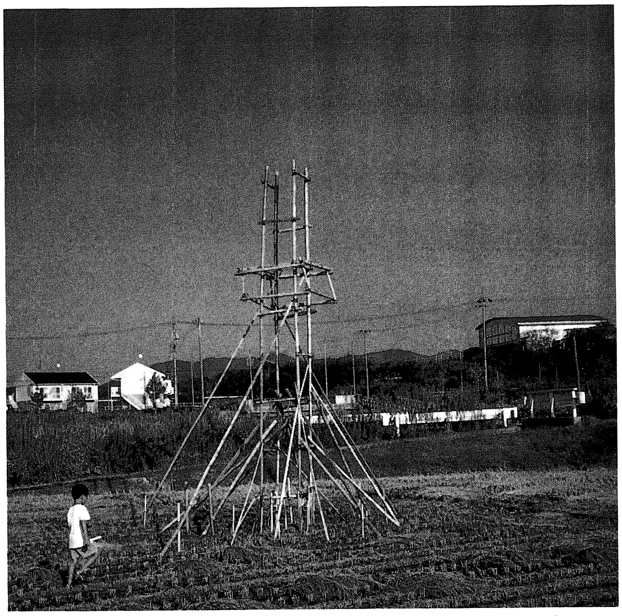
人間の自然への働きかけを環境と捉えるならば、八田川のありようは、ここの住人たちの営みの、現われである。

竹によるこの「インスタレーション」が、新しい風景を生み出し、作品たちが語りかける。

ここから、発見や感動を、受け止めたい。



八田川で遊ぶ人たち



'96の作品より

d　地域・地元の理解と援助

イ　大草区のご理解と援助

1994（平成6）年・初年は、本大学で開かれた「おおくさ展」の第2回と位置づけ、イベントの要素を多く盛り込み「おおくさ博覧会」と銘打って、第2回「おおくさ展」を開催した。

この中のイベントとして、「バンブーインスタレーション」を、開催した。
この「博覧会」に際し、大草会館北側駐車場を、全面的に利用させていただき、ここを本部とし、様々なイベントが出来たのだった。

また、オープニングに際し、東西の両区長さんの臨席を得て、オフィシャルなものとなった。
これを契機に、私たち「おおくさ探険隊」を認めていただき、その後の様々な活動に対して、ご理解ご協力を、いただけるようになった。

ロ　土地所有者・耕作者の理解と援助

稲の刈り取りを終えたあととはいえ、田んぼに縁遠い作者たちが、足を踏み入れ、竹やその他の素材を使い、立体造形を制作する。
間違った入り方をするかもしれないところを、快くお貸しいただくことが出来た。

場の確保がなければ、計画が根底から覆えるところであった。
これまでのご理解ご協力に、深く感謝申し上げ、今後とも変らずの、ご理解ご協力を、お願い申し上げる次第。

「おおくさ博覧会」より

作品を設営する学生たち

ハ　竹林所有者の理解と援助

子供たちのピクニック

本大学に於いては、学生の竹の利用への協力はあったが、私たち一般の利用に対しても、一時期に、しかも大量な切り出しにもかかわらず、快いご協力を、いただくことが出来た。

感謝するばかりである。

さて、実際、切り出しに竹林に入って見ると、荒れている竹林が多いことに驚かされる。

長く人の手が入らず放置されると、これ程までに、荒れた竹林になるのかと、驚かされるとともに、何とか美しい竹林にならないものか、との思いを抱かされるのだった。

この課題については、昨年（1996年）の9月、竹の切り出しにあわせて、竹林の分布と現況調査を行ない、利用させていただけるか否か、のヒヤリングもあわせて実施した。

これをベースに、今後は、ローテーションを組み、切り出しと手入れ・整備につなげていくことを、検討している。

城山の竹林の道

かわら版・号外'96.10「里山の風景」の表紙

3　参加者

a　1994（平成６）年

構想は出来上がりつつあったが、肝心の作品を、制作してくれる人たちを、如何に確保するか。

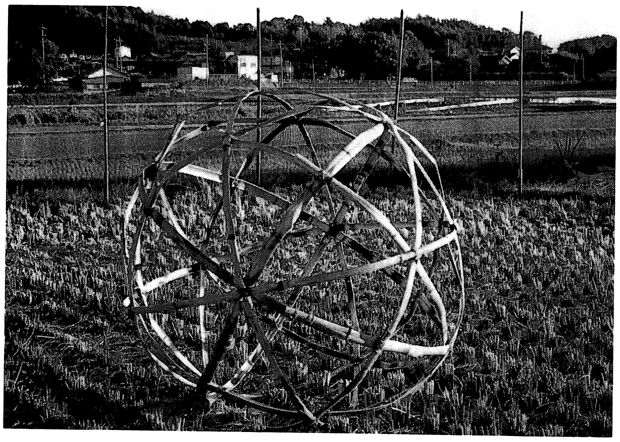
不確かで心細い限りであったが、幸いに、仲間のネットワークの中から、次の８グループの参加を得た。

感謝を込めて、記させていただく。

1　舟橋　伸治　＋　舟橋植木・ガイアネットワーク
2　あんどう雅信　～　胡乱衆（うろんしゅう）
3　保母　重徳
4　カワムラユヨウ
5　城田　竜一　＋　近藤　正樹
6　富田　崇　＋　澤田　寿紀
7　コバヤシゲオ
8　内藤　和彦　＋　中部大学・内藤研究室
　　　　　　　　（19人の３年生）
＋　～連動　本短期大学・インターメディアコースの学生
　　　　（鈴木勝之講師の指導にて、３作品）

こうして、８＋３＝11の作品が、最初の立上げに於いて、制作・展示された。

'94年の作品より



'94年の作品より

'94年の作品より

'94年の作品より

b　1995（平成７）年

第２回は、インフォメーションの充実や、第１回の実績の浸透、理解や関心を得て、参加者は飛躍的に多くなり、21グループを数えることが出来た。

そして、連動参加も、
本大学キャンパス内に１グループ（大橋　義博講師＋学生）を得た。

私たちメンバーも参加する流れが出来てきたことに加えて、地元の篠岡中学校（美術クラブの生徒、そして指導の岡村先生）の参加を得たことが、新しい喜びであった。

またこの年も、
本短大からインターメディアコースの４グループ、本四大よりスペースデザインコースの１グループの、合計５グループの参加を得た。

そして、初年に続いての参加は、６グループあり、定着の実感を持つことが出来た。

c　1996（平成８）年

第３回は、28グループの参加。
また、今年からこう位置付けた、招待１グループ。

そして、連動参加も、
本大学キャンパス内に３グループ（大橋　義博講師＋助手＋学生）を得た。

特筆すべきは、昨年に続いて、地元の篠岡中学校の美術クラブの皆さんの参加。

そして、地元の大城小学校のPTAの有志の皆さんの参加。

さらに、私たちの発行する機関紙「かわら版」での呼びかけに答える形での参加を１人（一家）得たこと。

そして、小牧市内より、小牧エコロジー運動市民の会「えころ」の有志の皆さんの参加を得たこと。

また、３年連続の参加が５グループあり、２年目にも増して、うれしい限りであった。

作品で遊ぶ風景

'96年の作品より

4　新しい風景の創造

a　作品

上記参加者の項で触れたが、以下に、作品についてまとめる。

初年は、とにかく立ち上げで、「バンブーインスタレーション」の名称のみで実施した。

２年目からは、「おおくさ」の風景を成立させている重要な要素をタイトルに上げ、作品と風景との結びつきを、より明らかにする意図を持たせた。

＊1994年　～総計11作品
～タイトル・・・特につけず。
～８つの作品
＋３つの連動作品（本短期大学）

＊1995年　～総計22作品
～タイトル「幻の風景」
～21の作品
＋１つの連動作品（本大学）

＊1996年　～総計32作品
～タイトル「里山の風景」
～28の作品
＋１つの招待作品（野点）
＋３つの連動作品（本大学・短期大学）

＊　ところで、作品制作の側のスタンスは、如何なることになるのであろうか。

特にプロの表現者である人にとって、この条件での思考・制作は、普段の制作活動とどのように関係づけられるのだろうか。

今後の展開の中で、世界観、地域性、現代性、独自性、表現などをキーワードに、語り合ってみようと考えている。

b　新しい風景

作品制作への参加、鑑賞への参加の呼びかけは、人のつながりのネットワーク、機関紙「かわら版」、さらに、マスコミによっている。

初年よりの「マイタウン桃花台」に加え、昨年は、「小牧・くらしのニュース」、小牧市の「広報」に掲載でき、充実・定着してきた。

回を重ねるにつれて、制作者は上記のように、充実してきているが、鑑賞の側はどうか。

昨年、開期中の見学会・「作品見学ツアー」への参加は少なかったが、「見ましたよ」の挨拶がわりの声は、年々増えてきている。

また、特に昨年は、三々五々、散歩・散策しつつ見学する人が、目についたりで、定着してきたことを実感している。

この開期の頃は、気候もよく、散歩・散策には、もってこいの頃で、私たちの雑談の中でも、弁当とお茶やビールをもってのピクニックに最適と話していた。

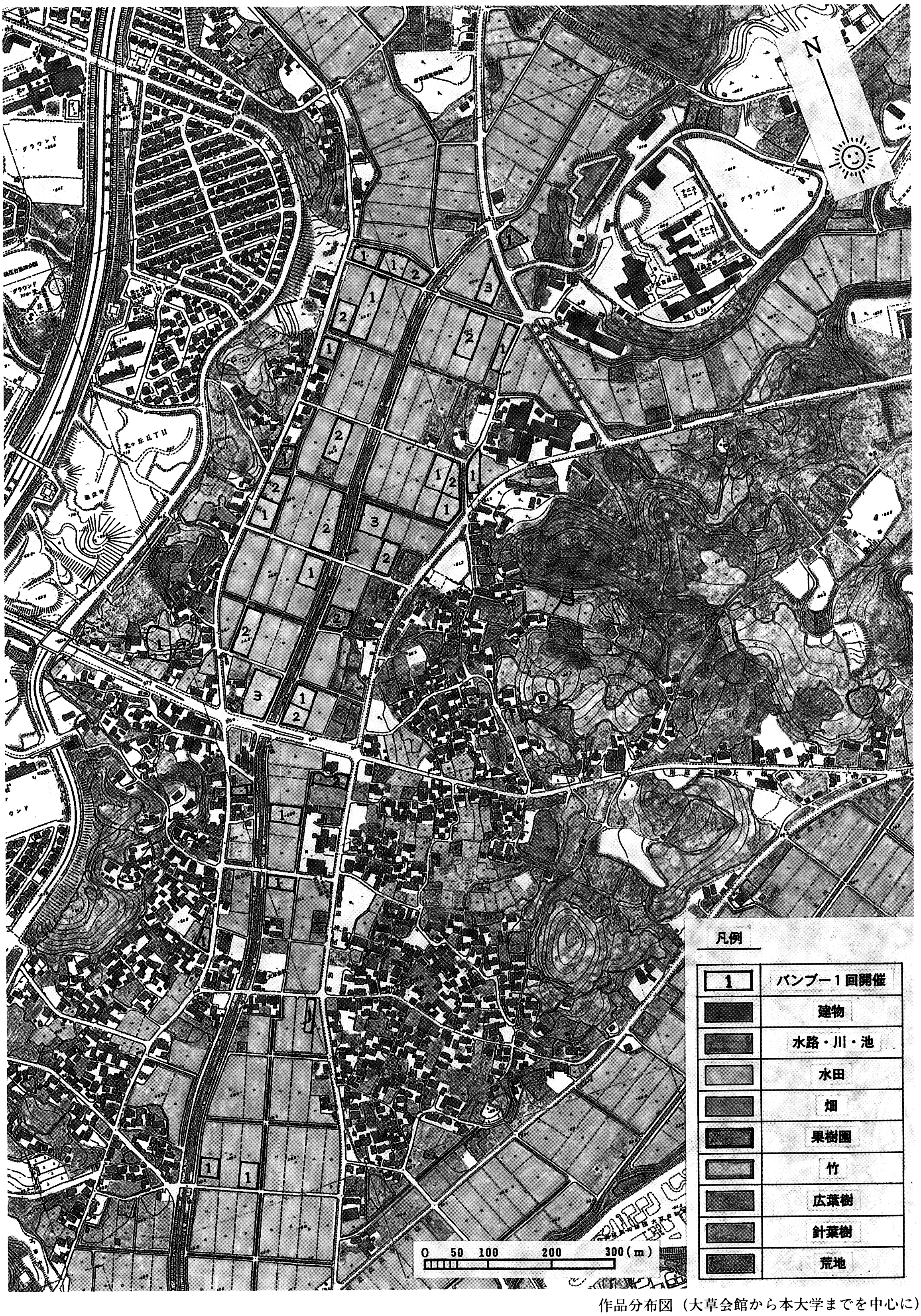
これを、昨年の「かわら版・号外」に掲載したところ、期間中に、桃花台光ケ丘にある、旭ヶ丘第二幼稚園の先生と園児の皆さんが、ピクニックを実施され、新しい連携が実現したのだった。

さて、作品の点在する風景は、人の行動を誘発し、人のいる風景は、生き生きとして新鮮で清々しい。

作品を観て回る人々の姿に、身近な人たちの顔に、また自分の気持ちを確認しても、心踊る気持ちを、発見する。

この風景が、イメージしていた一つかもしれない。

ここから、水・八田川という重たいテーマへの、ステップアップを目指していくのだと思う。



作品分布図（大草会館から本大学までを中心に）

c　関連イベント

イ　スタンプラリー

竹で作ったハンコとカラフルなスタンプ台を、各所に配置し、特に子どもたちに、楽しみながら散歩・散策してもらうことを狙った。

*'94年　～この年は、「おおくさ博覧会」のイベントとして、この地域全体の中で、3つのコースを設定した。
・学校コース（6ヵ所）
・寺社コース（6ヵ所）
・自然コース（6ヵ所）
計18ヵ所

*'95年　～この年は、作品に対応して18ヵ所に設置した。

*'96年　～この年は、作品の増加にともない作品と対応出来ず、要所要所に、やはり、18ヵ所に設置した。

毎年、評判はよく、今後も継続していきたい。もっと関連づけ、改良工夫する宿題が残る。

ロ　竹細工教室

子どもの頃、誰もが経験してきた遊びの中から、竹を使った遊び・工作をと考える中で、竹トンボ、竹テッポウ、竹はし、たこ、などなど、竹細工の場を、メンバー自身の楽しみも兼ねて、開催した。

*'94年　～「博覧会」の中で、5日間。
*'95年　～開期中の、5日間。
*'96年　～開期中の、3日間。

その後、桃花台にある光ケ丘小学校の6年4組の工作の時間に、竹細工をとの呼びかけをいただき、竹の箸、竹トンボを子供たちと一緒につくることが出来た。
また一つ、新しい展開が始まってきた。

'96年の作品より

竹細工教室の風景

ハ　スライド会

これは、後出の「九日亭」(飲み会）と連動し、交流の花・催し物として、行なわれる。

毎年、何人かのゲストがあり、彼等のスライドも楽しみの一つとなっている。

第２回から、バンブー作品を、作者のコメントを得つつ、みんなで楽しむひと時になってきた。

スライドの内容を、以下に示す。

＊'94年
～エジプト（内藤和彦・中部大学）
～モロッコ（水野秀彦・元海外青年協力隊員）
～ネパール〈ビデオ〉
（舟橋伸治・元小牧青年会議所）

＊'95年
～バンブー作品（おおくさ探険隊）
～チベット（あんどう雅信・造形作家）

＊'96年
～バンブー作品（おおくさ探険隊）
～タイ・アカ族・竹の家（北田英治・写真家）

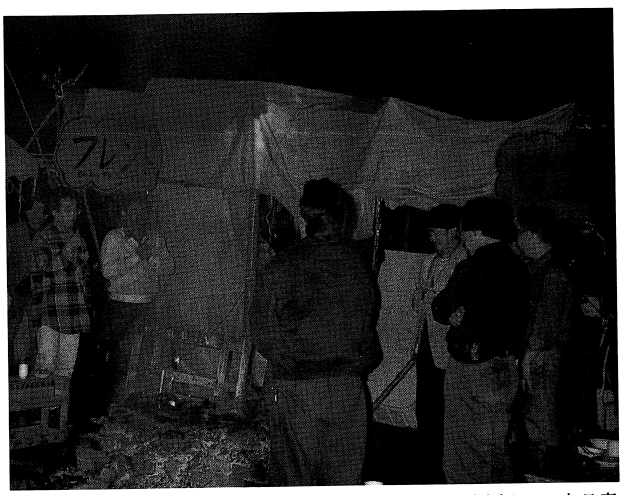
ニ　九日亭（居酒屋）

これは、'94年の「おおくさ博覧会」の開期中の９日間、毎晩居酒屋を開き交流の場としたが、この期間限定の居酒屋から名付けたもので、以来、飲食の集まりを、「九日亭」と呼ぶ習わしとなっている。

＊'94年・10月29日～11月６日の９日間。
＊'95年・11月４日（土）の１日。
＊'96年・11月９日（土）の１日。

ちなみに、毎月の最後の金曜日夜を、九日亭として、交流の場としているので、是非、のぞいてみてほしい。

'96年、大草会館でのスライド会



たき火を囲んでの九日亭

5　今後に向けて

a　運営

毎年、今年もやろうと、決意を新たにし、そして何とか実現出来てきた、というプロセスであったが、「石の上にも３年」の３年の実績・成果を、得ることが出来た。

この「バンブーインスタレーションinおおくさ」は、私たち「おおくさ探険隊」のメインの活動として、実施されてきたが、企画、折衝、告知、広報、手配、受付、作業などの実務は、エネルギー、情熱、人と人の広がり、の裏付けがあってはじめて、遂行出来たのだと痛感している。

こうした活動を通して、何にも換え難い、貴重な、実に多くのことを、体験出来たのだった。
私を含め十数人のメンバーそれぞれが、３年間の経験を経て、次のまた新しい展望を抱く段階に立っている。

今後も、また、白紙の状態から、スタートを切ることになろう。
時間とエネルギーの結集という、高いハードルを越えていかねばならないが、あくまで、メンバー個個人の主体性が基本である。

昨年の出会いの一つを、特筆しておきたい。
毎年、新しい出会いの沢山ある中で、竹炭を製作・製品化している江南市在住の小出さんとの出会い。
今まで、開期後の回収した竹は、幾らかを保管し、残りは全て焼却していたが、昨年は、小出さんに、全て引き取っていただくことができた。

竹炭は、竹という自然の資源の有効利用にもつながり、今後の活動に関連付け、生かしていきたい。

b　課題

昨年、第３回を無事に終えたが、やはり幾つかの課題を持ち越し、また、新たな課題を与えられた。

イ　地元の一般の人々が、作品制作へもっと参加し、ものづくりの難しさ楽しさを体験してもらいたい。
　より多くの人々と、この体験を共有したい。

ロ　また、特にこの地域につながりがなくとも、広く一般の人々にも、制作のよろこび、作品を通しての交流、外部からのこの地域への新しい風・空気を運んで来て欲しい。

ハ　初年から実施しているスタンプラリーは有効で、子どもたちには魅力のようだ。
　達成の褒美のこと、スタンプの在り方などの、検討・改善が必要。

ニ　企画・運営への、地元の積極的な参加・支援の必要性。
（大学、小中学校、区、各団体、さらに市）

ホ　毎年秋の10月下旬～11月中旬の約１ケ月間を、この地域全体の文化月間と位置付けて、小中学校、本大学・短期大学、団体などが開催する発表会や催し物を、この期間に集約・結集できないか。

ヘ　さらに、竹林の手入れを、楽しみつつ、より多くの人々の参加で、実施できないか。
（整備された竹林の美しさ心地よさ。）
　これは、作品の制作者はもちろん、小中学生、大学生、一般の大人までの、共通・共有体験として定着出来ないか。

ト　さらに、この「おおくさ」の環境を、より良くしていく気持ちを、具体的な行動に結び付けていくための仕掛け・仕組の必要性。

「おおくさ」の風景

おわりに

この「バンブーインスタレーションinおおくさ」を展開していく中で、近しい人からも言われ、また私たち自身も実感していることは、「継続する」ということである。

最初は、続けられればと、漠然と捉えていたが、次の年、第2回には、「継続する」ことの大切さを、強く意識した。

年々のタイトル～テーマを設定したのも、その現われの一つである。

地元・地域の人々、幼稚園、保育園、小中学校、そして、本大学・短期大学、一般の大勢の人々に、「バンブーインスタレーションinおおくさ」が、毎年の恒例行事として受け入れられ、定着するよう、今後も精力的に、展開していこうと考えている。

各位のご理解とご協力を、改めてお願いする次第。

＊桃花台開発基本計画図は、県桃花台建築事務所　提供。

＊「おおくさ展」DMは、「小牧地域研究会」提供。

＊写真、「かわら版」表紙及びバンブーDMは、「おおくさ探検隊」提供。